

全 体 研 究 総 論

1 研究主題

知の再構成を目指して

「かかわり」を生かした学習課程の工夫
〈3年次計画の2年次〉

【 本校研究の概要 】

本校では、生徒に「真の理解に近づけさせ、学ぶことの楽しさに気づかせたい」ことをねがい、研究を積み重ねている。

平成20年3月、新学習指導要領が告示された。この新学習指導要領は、学校教育法で定められた学力観とPISAなどに見られる世界的な学力観の流れを汲んでいると考える。この流れを踏まえ、昨年度より新学習指導要領で求められているキーワードに着目した。

まず、我々がこれまで積み上げてきた義務教育期に押さえるべき基礎的な知識・技能の「習得」。そして、基礎的な知識・技能を活用して課題解決する「思考力・表現力・判断力」である。さらに、学ぶべきことを生徒自身が身に付けたと実感することを通して養われる、主体的に課題に取り組む態度、すなわち「意欲」である。これらを育成するために、本校ではこれまでに「かかわり（学習内容の関連性）」という観点から研究に取り組んできた。

本校のこれまでの研究の課題から「表現力」が挙げられた。自分の思いや考えを発信していくことは、今後の知識基盤社会を築く生徒にとって最も身に付けてほしい力の一つである。本校では、「内的総合化」をキーワードに生徒自身のもつ知識や概念を関連付けて考える研究を続けてきたが、この知識や概念を社会に発信することでこれをさらに深化させることができると考えた。社会に発信するためには、自分もっている知識や概念をもう一度見つめ直し、相手や状況によって「再構成」しなくてはならない。このもう一度作り直す機会を学習過程の中に組み込み、学習サイクルを確立することで、本校のねらいにさらに近づくことを目的とした。

具体的には以下の3点を柱と設定している

I 「かかわり」（学習内容の関連性）を生かした学習課題・活動の設定

生徒が興味関心を持ち、学習活動を通して様々な関連性に気づき、学ぶことへの知的好奇心を揺さぶる課題を設定する。

II 学んだことを伝える活動

学んだことを言語活動を通して発信させる場を設定することで、生徒自身の考えを整理・構成させる。そして、生徒同士が響き合い、発展的な学習へとつなげる。

III 学びの評価

自らが、どのように学んだのかについて振り返り評価する。学びを振り返らせることで、不足している部分に気づかせ、より確かな基礎的な知識・技能の習得につなげさせる。また、学習過程を意識させることで、活用することができる知識や技能に「再構成」させることを目指す。

このように、「再構成」は、発信のみではない。発信することを通して、自分の学びを見取り、改めて不足している知識・技能の習得をすることもねらいとしている。この3点を学習過程にバランスよく設定することで、新学習指導要領で求めている力をより効果的に育成することを目指したい。そして、知識・技能を活用できる状態に「再構成」することで、課題を解決することができる思考力等をはぐくむ研究をすすめたい。

2 これまでの研究経緯

【平成14年度 ～ 平成16年度】

研究テーマ「内的総合化をめざし、さまざまなかかわりを意識させる授業を創造する」

キーワード「内的総合科」「かかわり」

「内的総合化」というのは生徒一人ひとりの内面で、知識や概念が別々のものとしてただ記憶として把握されている状態ではなく、様々な知識や概念がつながり、未知のものに直面してもそれらの知識や概念をうまく使って取り込んでいける状態と定義づけた。

この状態を作り出すには、それらの中に潜むかかわりに目を向ける必要がある。単に教え込み（教授型）の授業やドリルだけを繰り返すだけといった授業、「こうすればこうなる」といった型にはまった授業だけをしていては、そういった力を生徒につけることはできない。表面的な理解、つまり記憶だけに頼っている知識を得ただけでは、本物の理解とは言えず、使いものにならない。

きちんと理解させ、後々にもそこで学んだものを活用できるような能力をつけさせなければならない。きちんと理解させるということは、別々のものに見えるものの中に共通点を見いだすこと、また、同じに見えるもの同士の中に相違点を見いだすことであると考え。それは、両者のかかわりを認識する（関係を把握する）ということである。授業では、生徒たちにそれらのかかわりが自分なりに意識できるよう仕組む実践を積み重ねてきた。

【平成17年度 ～ 平成19年度】

研究テーマ「かかわりを見いだす活動を重視した授業を創造する」

～学習内容の関連性に焦点をあてた教材研究と授業づくり～

キーワード「かかわり」「見いだす活動」

それまでの研究を引き継ぎ、本校での「かかわり」を次の3点と定義した。

- (1)教材と日常事象とのかかわり
- (2)教材の持つ学問の体系的なかかわり
- (3)教科独自のアイデア同士のかかわり

この中で、特に教材そのものが持っているかかわりに焦点を当てた。それは、学習した内容が生徒の頭の中に1つひとつバラバラでただ雑然としまわれるのではなく、整理され、構造化され常に必要なときに活用できるものとなるように学習内容がつながりを持ってネットワーク化することをねらったものであった。それには、生徒自らが知識を再構成しながら学びが進むように教材を工夫し、活動がともなうような課題をしっかりと練ることが大切であると考え、実践を重ねた。

【平成20年度 ～ 】

研究テーマ「知の再構成を目指して」

～「かかわり」を生かした学習過程の工夫～

キーワード「新学習指導要領」「言語活動」「かかわり（学習内容の関連性）」「学習過程」

平成20年3月に新学習指導要領が告示され、新しい方向性が示された。基本的な考え方は変わらないものの、知識基盤社会における「生きる力」をどのように身に付けさせていくか、「習得」「活用」「言語活動」などのキーワードと共に新たな視点が提示された。これまで本校が研究を積み重ねてきた「かかわり（学習内容の関連性）」という観点を生かして、生徒がもっている力を再構成することでより確かな定着・そして活用することのできる力へ育成することをねらいとする。

このような研究経緯と現在の生徒の実態を踏まえて、研究のポイントを以下の3点に絞った。

- (1) 学びへの意欲・姿勢

生徒が探究したくなるような課題・学習活動の工夫についても引き続き研究が必要である。これまでの本校の研究である「かかわり」（学習内容の関連性）を軸とし、学びの楽しさに気づかせたい。

- (2) 生徒の表現力の育成

生徒の実態から、プレゼンテーションをする力や自分の考えをきちんと伝えることなど、各教科での言語活動の充実を図る必要がある。全教科において、学習したことについて自分の言葉できちんと記述する力、友達同士で伝え合う力など、他者と響き合う取組を設定することで計画的に表現力の育成を図りたい。

- (3) 学びの評価

生徒自身が自分の成長を確認でき、教師が自分の授業の評価もできる、その上で、生徒の思考の様相や活動の様子がわかるような評価の工夫について研究をすすめたい。結果だけでなく、考え方の経緯を見取することは、生徒の思考を考えた効果的な授業づくりにつながると考える。

3 自らの力で知の再構成を

これまで本校が求めてきた力は、学習内容をさまざまな知識や概念と関連付けて考えようとする力であった。一見かわりの無い事柄も、共通点や相違点を見いだすことを通して、関係性を把握することで、ただ単に一つの知識として持っているのではなく、さまざまな課題に対して活用できる知識として学ばせることが「真の理解に近づける」ために必要だと考えた。

そして、この力を身に付けさせるために、学習課題と学習活動に焦点を当てた。それは、生徒自らが自分の力で課題を解決することが重要であり、学習に対する好奇心を育てる意味からも、「自らの力」で解決させる体験を多く積み重ねる必要があると考えたからである。これまで、各教科において、活動（作業・実験・体験）を通して学ぶ学習スタイル、そしてその活動に耐えうる学習課題をつくる研究を行ってきた。

新学習指導要領が告示され、そこで求めてられている学力を身に付けさせる手だては、私たちの求めてきた学びと同じ方向性であることを確認した。すなわち「基礎的な知識・技能の習得」「これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力の育成」「主体的に学習に取り組む態度を養うこと」である。これらをバランス良く育成することが求められていることを踏まえ、我々の研究の中でさらに踏み込んでいくために、「再構成」というキーワードを設定した。このキーワードは、新学習指導要領と本校研究をつなぐものである。

(1) 発信するために再構成

今回の学習指導要領改訂の改善事項の一つに「言語力の充実」がある。これは目的や相手、場面などを考え、判断し、自分の思いや考えを相手に伝える活動の一層の充実を求めているのである。これまで弱いとされてきた表現力にも通じる部分があり、本校においてもこの力が不足していると、研究の課題の一つとして生徒の表現力の不足が挙げられてきた。

しかし、本当に生徒にこの力が不足している能力なのかと疑問に思うこともある。これまでの学習形態を見てみても、特に中学校においては生徒が受け入れるタイプの学習形態が多かったのではないだろうか（逆に小学校では、活動ばかりが目立ってしまうと言われるが）。生徒が表現する機会が少なければ、表現について着目しないだろうし、またその必要がなければ、その能力を育てようと思わないのは自明のことである。そこで、これまでの研究内容の学習課題・学習活動に、「表現活動」というもう一つの方法を位置付けることで、さらにバランスの良い力を身に付けさせることができるのではないかと考えた。

私たちはこれまで「内的総合化」をキーワードに、生徒自身のもつ知識や概念を関連付けて考える研究を続けてきた。発信するためには、さまざまな条件を整え自分の中にある知識や概念を「再構成」して表現しなくてはならない。つまり、習得した知識や技能を活用して表現するためには、それまで自分が理解していたものを伝える相手の状況・媒体に応じて作り直さなくてはならない。伝える相手は、クラスの友人、教師、家族といった身近な存在から、全校生徒や地域社会、世界まで大きな広がりをもつ。媒体も、話し合い・発表のための音声言語をはじめ、ワークシートやレポートなどの文字言語、インターネットなどのマルチメディアに至るまで様々である。

何が求められているのか、相手はどこまでわかっているのか、どのような方法があるのか、どのようにすれば効果的かなどを考え、判断しなくてはならない。これは自分がこれまで身に付けた知識や概念をもう一度見直す機会にもなるのである。そこで、我々は表現して発信するために自分思っている知識や概念をもう一度構成する活動を仕組むことによって、表現力を育成したいと考えた。

(2) 再構成を通して見つめ直す

生徒は、発信するために知識や概念の再構成を行う。しかし、この再構成には発信だけではなく受信することも含んだ双方向性も持ち合わせる。それは、アウトプットに向け構成するだけでなく、外的なものへの刺激をフィードバックすることで内的な知識や概念を新たに再構成することが考えられるからだ。つまり、表現活動を通して自分自身を振り返ることで、曖昧な理解になっていたり、不足していたりする知識

や技能を改めて確認する。そして、これまで身に付けた知識や概念を再認識するため、また基礎的・基本的な知識や技能を改めて習得するために学習するといった学習のサイクルが生まれると考える。

このことは、自分の学習の仕方を知ることにもつながる。どのように学習をしてきたのか、どのような学習活動を通して理解が深まったのかなど、再構成を状況に応じて行うことで、より効果的な学びへと発展することが期待できるからである。表現してみて初めてわかるという経験を生徒自身が繰り返すことで、より高次の学習サイクルへと自分自身を育て上げる基盤を育成することができるのではないかと考える。

(3) 学びへの意欲

再構成は、あくまでも自分もっているものを作り直すということである。しかし、作り直す度に新たな「かかわり」をつなぐ視点が少しずつ身に付いていくはずである。再構成したものを発信し、形になったとき、つまり自分の考えに対してリアクションが返ってきたとき、相手に思いや考えが伝わったと実感したとき、さらに何かしらの達成感を持ち、新たな目標を抱くときと考えられる。自分が発信したことに対して何らかの反応があったとき、表現する喜びを味わえるはずであり、この達成感は次の学習への意欲とともに、不足している部分の知識や概念を改めて習得しようとする意欲を喚起することにつながると考えられる。

しかし、その出発点として求められるのは、自分の思いや意見を表現しようとする意志である。多くの学習機会を設定し、生徒が学習活動を通じて、表現することが学びにとって有益であると生徒自身が感じることを経験させることでこの意志は強まると考えられる。内なるものを表に出すために再構成することは、今後の知識基盤社会に生きる形成する生徒にとって必要不可欠な力となるであろう。

(4) 再構成したものを評価する

これまで本校では、前述したとおり、生徒に「真の理解」に近づけさせる知識や技能をどのように身に付けさせるか、その方策について研究を進めてきた。しかし、生徒個人の中でどのように理解されているかをとらえることは難しく、これまで生徒が活動を通して問題を解決することで、「理解が深まったであろう」といった主観的なものにとどまっていた。この点に関しては、これまでの研究の課題として挙げられていた。

そこで、生徒個人の中でどのように理解が深まったのか、また、様々な課題解決のために活用できる知識や技能となったのかを見取るために、生徒が表現することを通し、表現したものをみることで評価にもつなげる。これは教師の立場からの評価はもちろんのこと、生徒自身の自己評価、また友人などの他者評価を通じて生徒自身が評価できる力を育てることにもつながる。

このように、「再構成」をキーワードに、表現する学習活動・自分自身を見つめ直す活動を設定した。「生徒自身が身に付けた知識や技能を、言語活動などの学習活動を通して活用できるように再構成することで、課題解決するための思考力・表現力・判断力等を高めることができる」と、考える。

新学習指導要領では、実生活に生きる力が求められている。自らを認知し、育もうとする態度であり、課題をよりよく解決するために行動する力である。そのためには、常に自ら学び続けようとする姿勢が求められる。学校現場において、表現する活動を通して、自らの知の状況を把握し、「再構成」することで、理解をより確かなものにしようとする生徒の意欲を喚起することを目指す。その結果、学ぶことの楽しさに近づけるものと考えている。生徒が、課題を解決するための視点について考え、活動する力を育成する学習を研究していきたい。

4 「かかわり」を生かした学習過程

生徒が学ぶことに対して意欲的に取り組んでほしいという願いから、これまで生徒が興味・関心をもつ学習課題、学習活動の設定について考えてきた。そこで、「かかわり」（学習内容の関連性）に着目し、生徒のもっている知識・技能を様々な関連付けて考えさせる課題と活動を授業に取り入れた。

これらの学習活動を通して、生徒は学習に対して意欲的に取り組み、学習内容の理解を深めようとする姿が見られた。しかし、課題として、全国的な傾向と同じ傾向が本校生徒にも見られた。つまり、「知識」は身に付いているが、それらを活用し課題を解決する力が弱いという傾向である。

昨年度まで2回実施された全国学力・学習状況調査では、「知識」に関する設問に対しては、高い正答

率であった。設問自体を比較してみても、「活用」に関する調査では、特定の設問に対して低い正答率がみられた。国語科では「自分の考えを書く」「説明する」「情報を活用する」、数学科では「説明する」という設問である。これは、国語科と数学科だけの調査であるが、本校研究の昨年度の課題の一つでもある「自分の考えをきちんと表現できない」という点と重なっている。つまり、知識がきちんと自分のものになっていない、整理されていない状態と考えられる。

この調査結果は、本校の研究を進める上でバックデータとなる。これまでの本校の研究は、活動を通して内的に深めていく形であったが、これらを外に向けて発信させることにも着目しなくてはならないのではないかと考えられる。受信と発信は双方向である。この活動を通して、生徒が自分のもっている知識や技能を活用できる楽しさを味わい、さらに知識や技能などを習得したい、考える力を身に付けたいという次の学びの意欲につなげることができればと考える。

そこで、研究を以下の3点に設定した

(1)「かかわり」(学習内容の関連性)を生かす

一般的に教育におけるかかわりとは、生徒と生徒、教師と生徒など教室における人間関係を示すときに使われる。しかし本研究では、生徒が押さえるべき学習事項を中心とし、そこから様々な分野へ関連付けて考えることをねらっている。つまり、様々な関連付けを行うことで、学習事項がより深く、広がりを持った状態で認識されるものと考えている。そこで、あえて人的なコミュニケーションであるかかわりの意を持ち込んでいない。これは、学習時にコミュニケーションを通して深める場面もあるが、生徒が自らの力で解決する場面も大切にしたいという思いも含まれている。もちろん、コミュニケーション能力も育成すべき力であるが、それに関しては、言語活動として学習内容を表現する場を設定していきたい。

生徒が学習意欲を喚起されるような学習課題と学習活動を設定するために、以下の3観点を基に「かかわり」をとらえてきた。

- 1) 教科の学習内容同士の「かかわり」
- 2) 教材の持つ学問の体系的な「かかわり」
- 3) 教材と日常事象との「かかわり」

学習した内容が生徒の頭の中に1つひとつバラバラでただ雑然としまわれるのではなく、上記の観点により整理され、構造化され常に必要なときに活用できるものとなるように学習内容がつながりを持ってネットワーク化することをねらっている。それには、生徒自らが知を再構成しながら学びが進むように教材を工夫し、活動がともなうような課題をしっかりと練ることが大切である。このような実践を積み重ねることによって教科の真の理解、本当のおもしろさに気づかせたいと考えている。

これまでの研究では、この「かかわり」を生徒自身が見いだす活動の場面について研究してきた。この「かかわりを見いだす活動」とは、観察・実験、調査、見学、課題学習、発表、ものづくり、操作、作業などである。活動については教科の特性によって様々な形態となる。教師は、このような活動を重視した授業を仕組み、じっくり考える場を与えることで、生徒の作業として表に出した思考の一端を注意深く観察し、評価することが可能となってくる。ただ単に教師が教材研究して得たかかわりを生徒に与えるのではなく、そのかかわりを生徒たち自らが見いだせるような活動の場を授業の中で作ってきた。しかし、活動中の生徒を評価すること、生徒がどこまで学びを深めたのかを判断することなどの見取りに関しては難しさが感じられた。また、生徒の中で「かかわり」を見いだすことはできたが、それを次の学習に活用できるまで構造化されているかどうかを見極めることはできなかった。

(2) 学んだことを伝える学習活動

これまで、「かかわり」を生徒が見出す学習活動を取り入れてきた。生徒自身が活動を通して新たな学習内容の関連性に気づき、理解を深めていることがワークシートや作品から見取ることができた。生徒が自力で課題を解決することで、学びの面白さに自ら気が付き、次の課題へと向かおうとする姿勢も見られた。しかし、理解した内容について友人にきちんと説明する場面や、理解した内容について自分の考えをもち、その考えを友人と話し合うといった場面では、きちんと表現されていない実態が多く見られた。

新学習指導要領の改善事項にも「言語活動の充実」挙げられているが、本校においても昨年度から、学習活動を通して生徒自身が一度理解した知識・技能をさらに確実なものにするために、表現するための活動を取り入れてきた。生徒が、学んだことをもう一度呼び起こし、伝えるために新たな形に作り直す活動を学習過程に仕組んでいきたい。これまでの研究が、概念や感性を膨らませるためにさまざまな「かかわ

り」を見いだすことを入力だとすると、本年度からの研究は、学習活動で得た「かかわり」を生徒が振り返り、整理し、発信する出力に当たると考えられる。入力したものを出力するために表現することを通して、生徒の理解・感得をさらに広げ深めることができると考える。

ただし、出力と入力にはバランスが必要である。つまり、教科の特性や指導の目標のねらいによって出力に重点を置くのか、入力に重点を置くのか変わってくるということである。必要なことは、これらを効果的に学習過程の中に組み入れることである。そして、これらの学習の流れを全教科で取り組み、生徒が学びの流れを感じることで、考えることへの意欲化につなげることができると考える。

このように、これまでの課題に迫る活動の場に加え、生徒が学習したことを目的や状況に応じて表現する場を学習過程に取り入れていく。言い換えれば、これまで情報を受信することで内的に理解を深めていた学習を、発信する場を与えることで、表現力を高め、理解を確かなものにしようという展開を仕組んでいく。自分の考えを表現したり、自分と違う考えに触れたりすることができ、学びの広がりを感じることは、生徒の意欲の向上につながると考える。そのために、生徒が自分の考えや意見を目的・状況・相手を考えて構成し、適切に表現する力を伸ばしたい。

(3) 学びの評価

伝え合う場面を学習過程に組み入れることは、学びの変容を見取るという本校研究の課題に近づけるのではないかと考える。生徒が考えたことを相手に分かるよう構成し、表現したのかを発言や作品だけでなく、ワークシートや評価シートなどを工夫することによって見取りたい。さらに、生徒自身にも自分の考えがどのように変わったのか、何によってできるようになったのかという自分自身の変容を見取らせたい。

そこで、「かかわり」を基に、生徒の中で「わかった」「できた」というものがどこまで理解できたのか、またどのように理解したのかをより明確にさせる必要があると考える。「わかったつもり」ではなく、どのようにわかったのか、どのような考え方・方法をたどることでわかったのかを表現させたい。学習活動で得た知識や技能を振り返り、表現することで生徒の知識や技能がより整理され構造化されたものとなって、より確かな理解になると考える。また、振り返ることで自分の学びの流れ、つまり学習過程を意識し、課題に向かうことができるようになるのではなだろうか。この評価活動は、生徒自身の理解を深めるだけでなく、より新たな学びに発展するきっかけともなるであろう。

自分の学びを評価することは、自分の知について自覚的になるきっかけになると考える。たしかに、生徒自身がこのような視点をもつことは難しいことである。しかし、全教科で取り組むことで少しずつ見えてくるものもあるのではないだろうか。自己評価能力という観点からも積み上げていきたい。そして、自分の学びを客観的に分析することで、新たな課題と向かい合ったときに自分の知をどのようにつくりあげればよいのか考えられるようになることを期待したい。

このように

- (1) 「かかわり」を見いだす課題・活動の設定
- (2) 学んだことを伝える活動
- (3) 学びを評価する活動

の3点を学習過程に位置付ける研究を積み重ねたい。

これらを各教科において、目標やねらいと生徒の実態に合わせて組み合わせることで、思考力、表現力、判断力が高まるのではないかと考える。

ただし、前述したようにこの学習過程を常に設定するというわけではない。学習内容によっては、スキルの活動が有効な場面も考えられるであろう。学習内容や各教科の特性に合わせて、これらの場面をフレキシブルに設定することで、より有効な学習過程について考えていきたい。

私たちは少しずつであるが、生徒に学習内容により興味をもたせ、自分のもっている力を使って考えさせる学習を仕組んできた。生徒が自分の知（物事の本質を知ること、対象を心や体に感じ取ること）を意識し、課題に対してどのような力を生かすことで解決できるのかという学習の流れは感じることはできたのではないだろうか。この学習の流れを生徒自身が見取り、自分がどのような学びをしたのかという認識をすることで、これまで自分が持っていた知をさらに再構成することをねらいとしている。つまり、自分自身を客観的に分析し、課題に対して適切に軌道修正ができるようにさせたい。そして、生徒がこのような学習活動を積み重ねることで、自ら学ぶことへの意欲へとつなげていきたい。このような研究内容を昨

年度より行っている。

【 今年度の学力学習状況調査より 】

本年度4月に実施された学力学習状況調査では、これまでとは違う傾向が見られた。

全国的には、これまで同様にB問題「活用」に関する学力が低いと言われており、今回のデータを見ても全国的にはA問題（77.4%）>B問題（75.0%）となっている。これは過去2年間の本校国語科でも同様の傾向であった。しかし、本年度の本校の結果はA問題<B問題とわずかであるが、「活用」に関する設問の方が高い数値となった。問題の傾向も関係していると思うが、これまでの本校の正答率から見ても、A問題に対する力が落ちたのではなく、B問題に対する力が付いたと見ることができる。これは、「活用する力」に関して、本校が行ってきた研究の成果の兆しとみていいだろう。

また、無回答に関して、ほとんどの設問で0%である。無回答率が高い設問（最高3.3%）は、国語科では漢字の書きや語句の意味など知識として備わっているかどうかが問われる内容のものであった。

今後、生徒の学力をさらに安定したものにするために、「かかわり（学習内容の関連性）」を生かした教材開発を続けるとともに、言語活動を取り入れた授業を行っていきたい。

5 研究内容

(1) 全体研究会

- ・全職員で共通理解をはかる。

全12回の校内研を開催し、本校の研究のあり方について考える。中等教育研究会の企画・運営についての検討を行う。

- ・講師を招聘し、理論研究を進める。

夏季校内研においてお二人の講師をお招きし、新学習指導要領や本校研究の方向性についてご講義いただいた。

- ・校内研究授業・研究会を実施。

3年計画で、全教科実施を目標としている。本年度は、理科（3年）、美術科（2年）、社会科（3年）で実施した。また、授業後の研究会のあり方についても新しい試みを重ねた。

(2) 各教科研究

- ・各教科において理論研究・授業実践を行う。

各教科のHPをリニューアルし、できるだけ実践を発信する機会を増やした。

- ・公開研究会での研究授業の実施。

7月の中等教育研究会では、全10教科で研究授業を実施し、300名を超える方々に参加していただいた。2月には、その後の研究の成果と課題を明らかにすべく事後報告会を開催し、8教科で研究授業・分科会を行った。

6 成果と課題

研究2年目ということもあり、各教科においては新学習指導要領の具現化を目指す上での課題も見えてきた。もちろん本校がこれまで積み上げてきた「かかわり（学習内容の関連性）」という観点が、生徒に提示する課題設定の上でも、我々教師が教材研究を行う上での視点としても有効に機能していることも確認できた。そして、これら一つ一つの授業や単元を計画的に関連づけ、流れの中で生徒を評価することで、生徒自身に思考の高まりを感じさせ、次の学びに向かわせることができるのではと考える。

本校の研究の「真の理解に近づけさせ、学ぶことの楽しさに気づかせたい」というねがいを実現するために、2年目の成果と課題を明らかにして、来年度へとつなげたい。

I 「かかわり」（学習内容の関連性）を生かした学習課題・活動の設定

生徒が興味関心を持ち、学習活動を通して様々な関連性に気づき、学ぶことへの知的好奇心を揺さぶる課題を設定する。

課題設定には、以下の3点についてからの観点が必要であることを確認し、研究授業において授業実践を行った。

(1) 生徒の興味・関心を引きつける内容

- ・未知の世界や自分の考えと違うものとの出会い。知りたい、分かってほしいという気持ちを抱かせる内容。

- ・「できそうだが、難しい」といった適度な困難性。
- (2) 関連性を考えさせる上で効果的な課題
- ・学習活動を通して理解を定着させるもの、もしくは新たな内容理解の糸口となるもの。
 - ・多様な解決法が考えられるもの。
 - ・関連性をとらえるための観点として
 - 1) 教科の学習内容同士の「かかわり」
 - 2) 教材の持つ学問の体系的な「かかわり」
 - 3) 教材と日常事象との「かかわり」
 が挙げられる。
- (3) 課題提示の方法，発問の工夫
- ・実際の生徒の思考の様子を見取りながら，課題提示，発問の工夫
 - ・学習の連続性を大切にする。

II 学んだことを伝える活動

学んだことを言語活動を通して発信させる場を設定することで，生徒自身の考えを整理させる。そして，生徒同士が響き合い，発展的な学習へとつなげる。

(1) 学習活動

- ・課題解決のために，目標やねらいを明確に設定する。
- ・適切な活動時間や活動形態を設定し，効果的に進められる環境を整える。

(2) 言語活動

- ・言語活動を計画的，意図的に設定する。
 - * 言語活動を意図的に仕組むために
 - ・言語活動が有効になるための課題
 - ・多種多様な意見の交流が可能な課題
 - ・何かの立場に立って意見を述べる課題
 - ・解決を求められる課題
- ・意見の発表等が適切に行うための指導・助言を行う。
 - ①聞き合うことと問合うこと（ペア）
 - ②共通点と相違点 それはなぜ生まれるのか（グループ）
 - ③よりよい考え方として発展させる。 いつでもいえるのか(全体)

- ・生徒同士の交流が，課題解決のために効果的であるように設定する。

交流における課題は，言語活動のための課題になってしまっただけではいけない。活動だけに陥ってしまう恐れがある。あくまでも活動を通して教科の学習目標を達成させることが大切である。

また，表現力の育成のために

- ・生徒のノート記述の分析
- ・書く活動の充実
- ・表現の多様性 式，言語，図
- ・前提条件と結論の明確化

についても今後，意識して授業を構築していきたい。

III 学びの評価

自らが，どのように学んだのかについて振り返り評価する。学びを振り返らせることで，不足している部分に気づかせ，より確かな基礎的な知識・技能の習得につなげさせる。また，学習過程を意識させることで，活用することができる知識や技能に再構成させることを目指す。

(1) 目標と評価の関連性

評価を行う際に，以下の観点を常に意識していきたい。

- ・関連性を考えさせることで目標やねらいとしていた知識・技能等を身に付けさせることができたか。
- ・生徒が学習の流れ意識し，学びに対して自覚的になることができたか。
- ・学習前と学習後の違いを明確にすることができたか。（生徒・教師共に）

- ・手だてが必要な生徒に適切な対処を行うことができたか。

(2) 学力向上、人間形成のための授業の改善の観点

- ・じっくり考え続ける 自制
- ・自分の考えを表現し、発表する 勇気
- ・間違いを認め、振りかえる 知的正直さ
- ・他者から自己を知る 省察

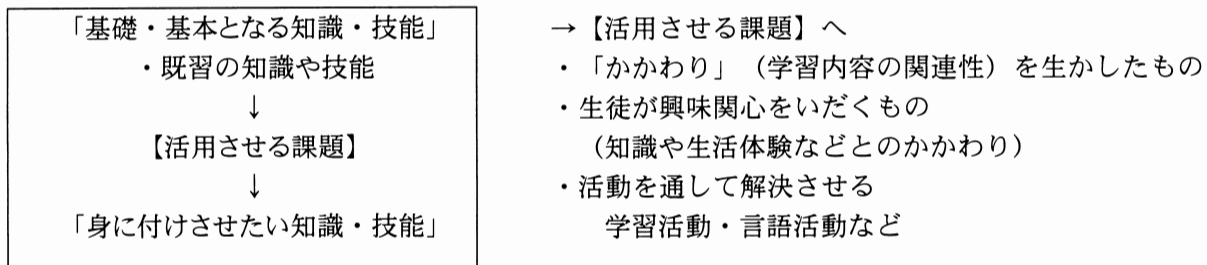
IV 学習過程の工夫

「『かかわり』を生かした学習過程の工夫」を具現化するために

I 学習課題，II 学習活動（言語活動），III 評価

の3点がバラバラでなく，どのようにつなげるかがポイントとなる。

新学習指導要領の言葉で当てはめてみると下表のようになると考えられる。

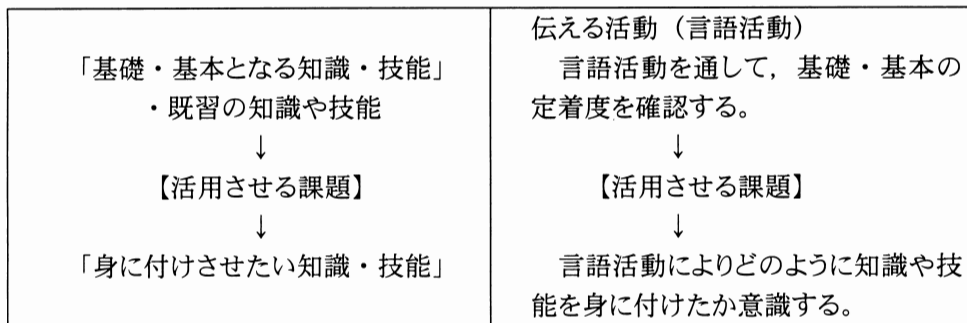


本校は「かかわり」，つまり関連性を考えさせるという視点をもっている。このことは，課題設定・学習活動を仕組む際に有効な視点となることは授業実践でも明らかになった。

しかし，そこまでの経緯を明らかにするためには，「身に付けさせたい知識や技能」と「基礎・基本となる知識・技能」をより明確にしなくてはならない。そして，生徒の学びへの興味関心を引きつける内容でなくてはならない。この条件をクリアすることは非常に難しいのであるが，そのための観点は大分整理できてきたと考える。今後，生徒の実態を見極める中で教師が研鑽を積み，教材研究と授業実践を積み上げることで，目標に近づいていきたい。

【学習過程を意識する】

どのように学んできたかを意識することは，課題に向き合ったときにどのようにアプローチすればよいかを考えるきっかけになるという仮定で研究を進めている。



I 学習課題，II 学習活動（言語活動），III 評価のバランスをもう一度考えて，指導計画に組み入れることを今後も研究を行う。

7 今年度校内研究会の日程

4/3(金)	第1回校内研	研究の概要 ・今年度の研究の方向性確認 ・研究推進委員会立ち上げ
4/13(月)	第2回校内研 教科研	公開研究会運営について ・授業者、指導・助言者、協力員の確認
5/13(水)	第3回校内研 教科研	事前研究会に向けて ・教科総論、指導案検討
5/29(金)	事前研究会	公開研究会授業の指導案検討
6/5(金)	第4回校内研 第1回授業研究会 教科研	第1回 授業研究会（理科：有賀雄三） ・事前研を受けて ・各教科の研究状況報告
6/29(月)	第5回校内研 教科研	公開研究会に向けて
7/4(土)	中等教育研究会	全体会 研究授業（10教科） 分科会
8/24(月), 25(火) 2日間	夏季校内研	中等教育研究会を終えて ・各教科の報告 ・講義「新学習指導要領と言語活動」 講師 校長 宮澤正明 山梨大教授 ・講義「学習指導要領が目指す学力」 講師 中村享史 山梨大教授
10/5(月)	第6回校内研 第2回授業研究会 教科研	第2回授業研究会（美術科：小田切武）
10/26(月)	第7回校内研 教科研	事後報告会に向けて
11/16(月) 11/18(水)	第8回校内研 第3回授業研究会 教科研	第3回授業研究会（社会科：奥田陽介） 研究授業と研究会の別日開催
11/30(月)	第9回校内研 教科研	事後報告会に向けて指導案検討
1/18(月)	第10回校内研 教科研	事後報告会準備
2/5(金)	事後報告会	研究授業（8教科） 分科会
2/8(月)	第11回校内研 教科研	事後報告会を終えて ・研究紀要作成
3/5(月)	第12回校内研	研究のまとめ ・来年度への成果と課題

7-1 校内授業研究会

- 1) 第1回授業研究会 平成21年6月5日(金) (理科3学年:有賀雄三教諭)
- 2) 第2回授業研究会 平成21年10月5日(月) (美術科2学年:小田切武教諭)
- 3) 第3回授業研究会 平成21年11月16日(月) (社会科3学年:奥田陽介教諭)

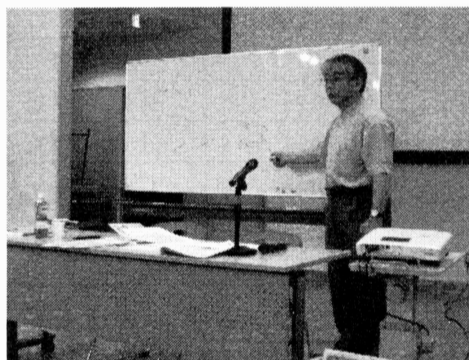
7-2 夏季校内研究会

講義1 「新学習指導要領と言語活動について」

平成21年8月24日(月)

山梨大学教育人間科学部教授 宮澤正明先生 (本校校長)

- 1) 言語活動を通して、国語科だけでなく全ての教科で言語力を付けていこうというねらい。
- 2) 言語活動の充実
- 3) 言語活動を通しての「かかわり」
- 4) 言語活動の一つとしての書写



講義2 「学習指導要領が目指す学力」 平成21年8月25日(火)

山梨大学教育人間科学部教授 中村亨史先生

- 1) 学習指導要領の変遷 系統主義と経験主義。歴史背景, 社会情勢が異なる。
- 2) 新学習指導要領キーワード
- 3) 思考力, 判断力, 表現力の育成
- 4) スパイラル
- 5) 附属学校として
- 6) 本校研究との関わり

8 事前研究会, 中等教育研究会, 事後報告会の内容

1) 事前研究会

- ① 日時 平成21年5月29日(金) 13:30 - 16:30
- ② 日程 全体会 13:30 - 13:50
各教科分科会 14:00 - 16:30

2) 中等教育研究会(公開研究会)

- ① 日時 平成21年7月4日(土) 9:00 - 13:00
- ② 日程

8:30 - 9:00	受付
9:00 - 9:30	全体会(30)
9:40 - 10:30	研究授業(50)
10:45 - 12:30	分科会(105)

③ 公開研 研究授業実施クラス

教科	授業者	クラス	教室	分科会
国語科	望月 陵	3-1	3-1	2-1
社会科	中田 敦	1-2	1-2	1-1
数学科	島口 浩二	3-3	3-3	2-3
理科	有賀 雄三	3-2	理科室	理科室
英語科	桑畑 秀子	3-4	3-4	2-4
音楽科	成田 幸代	2-4	赤レンガ館	赤レンガ館
美術科	小田切 武	2-1	美術室	美術室
保健体育科	飯塚 誠吾	1-1	プール	1-4
技術科	石田 剛士	1-3	技術室	技術室

3) 事後報告会

① 日時 平成22年2月5日(金) 14:00-16:45

② 日程

14:00 - 14:50	研究授業(50)
15:10 - 16:45	分科会(95)

③ 研究授業実施クラス

教科	授業者	クラス	教室	分科会
国語科	中込 幸雄	2-1	図書室	図書室
社会科	小林 淳真	2-4	2-4	2-3
数学科	櫻井 順矢	1-2	1-2	1-1
理科	内藤波矢登	2-3	理科室	理科室
英語科	高杉 廣張	1-3	1-3	1-4
音楽科	成田 幸代	2-2	音楽室	音楽室
保健体育科	飯塚 誠吾	1-1	グラウンド	2-1
技術科	石田 剛士	1-4	技術科室	技術室

* 美術科と家庭科は、研究報告会。

9 指導助言者・協力員一覧

教科	指導助言者	司会	研究協力員
国語	県教育委員会 指導主事 小林 大	小淵沢中学校 教諭 高左右美穂子	宇野 誠 大月東中学校
	教育センター 主幹・研修主事 佐藤喜美子		内藤セツ子 富竹中学校
	山梨大学 教授 須貝 千里		加藤 克人 北中学校
	山梨大学 教授 岩永 正史		小林 知子 上条中学校
社会	県教育委員会 指導主事 窪田 新治	山梨大学 准教授 服部 一秀	嶋田 拓郎 浅川中学校
	教育センター 研修主事 星野 徳一		保坂 一英 西中学校
	山梨大学 教授 佐藤 正幸		泉 晋一 上条中学校
	山梨大学 准教授 服部 一秀		五味 哲彦 南西中学校
			古屋 和彦 押原中学校
			秋澤 英俊 葦崎西中学校
			清水 晃彦 長坂中学校
数学	県教育委員会 指導主事 谷澤 浩明	東桂中学校 校長 小松 清	北原 宏明 上条中学校
	教育センター 研修主事 佐藤 邦彦		島田 基樹 富竹中学校
	山梨大学 教授 中村 享史		石川 哲也 櫛形中学校
	山梨大学 准教授 清野 辰彦		茅野 賢一 城南中学校
理科	県教育委員会 指導主事 武持 貴英	南中学校 教諭 石原 三正	望月 秀太 富竹中学校
	教育センター 研修主事 渡邊 真史		笹本 学 八田中学校
	山梨大学 教授 堀 哲夫		井上 公彦 増穂中学校
	山梨大学 教授 松森 靖夫		塚田 博紀 丹波中学校
英語	県教育委員会 指導主事 立川 武	久那土中学校 教諭 石原 敬彦	土屋賢一郎 南西中学校
	教育センター 研修主事 坂本 祐二		桐原 孝明 笛南中学校
	山梨大学 教授 古家 貴雄		近藤 達夫 西中学校
	山梨大学 准教授 田中 武夫		
音楽	国立教育政策研究所教育課程調査官 大熊 信彦	葦崎西中学校 教諭 秋山 哲夫	今村 淳一 東中学校
	県教育委員会 指導主事 葉袋 貴		上野 博史 北中学校
	教育センター 研修主事 橘田美喜恵		本田 恵美 北西中学校
	山梨大学 教授 手塚 実		川口 祐子 南西中学校
美術	県教育委員会 指導主事 鷹野 晃	城南中学校 教諭 窪田 眞敏	風間 謙 浅川中学校
	教育センター 研修主事 志村 伸		渡辺 直子 北新小学校
	山梨大学 教授 栗田 真司		近藤 京子 北中学校
	山梨大学 准教授 新野 貴則		保坂 直行 梨大附属小学校
保体	県立美術館学芸員 太田 智子	上条中学校 教諭 石川 忠史	渡辺 利徳 浅川中学校
	県スポーツ健康課 指導主事 萩原 長人		宮澤 宏明 梨大附属小学校
	教育センター 研修主事 河野 良一		五味 一也 山梨北中学校
	山梨大学 教授 植屋 清見		荻野 昭彦 城南中学校
技術	山梨大学 教授 福永 茂	北中学校 教諭 山岸 正人	中野 布美 北西中学校
	県教育委員会 指導主事 鈴木 昇		山本 英寿 梨大附属小学校
	山梨大学 教授 上里 正男		渡辺健太郎 東中学校
	山梨大学 教授 藤田 孝夫		濱田幸一朗 西条小学校
家庭		後屋敷小学校 教頭 奥平 洋子	藤巻 賢司 富竹中学校
	県教育委員会 指導主事 永田 恵子		松本 豊和 城南中学校
	教育センター 研修主事 清田 礼子		西川 卓 南中学校
	山梨大学 准教授 志村 結美		山主 公彦 南西中学校
	山梨大学附属幼稚園 副園長 武川はる美		星山 昌洙 市川中学校
			榛原砂穂理 白根巨摩中学校
			河野美由紀 一宮中学校
			柳澤 幸子 玉幡中学校

10 平成21年度校内研究会組織

